The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	芥川龍之介の短篇集『湖南の扇』に見る精神科学の影響 ： 「海のほとり」を中心に
Author(s)	金, 香花
Citation	間谷論集. 2022, 16, p. 152-131
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91353
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

芥川龍之介の短篇集『湖南の扇』に見る精神科学の影響

――「海のほとり」を中心に――

金　香花

〈キーワード〉夢、識域下、精神分析、無意識、快感原則の彼岸

はじめに

一九二七年七月『文芸春秋』に発表された、芥川龍之介の評論「続文芸的な、余りに文芸的な」には、以下のような一節がある。

「芸術は科学の肉化したものである」と云ふコクトオの言葉は中つてゐる。尤も僕の解釈によれば「科学の肉化したもの」と云ふ意味は「科学に肉をつけた」と云ふ意味ではない。科学に肉をつけることなどは職人でも容易に出来るであらう。芸術はおのづから血肉の中に科学を具へてゐる筈である。（中略）僕は必ずしも科学的精神を抛つてしまへと云ふのではない。が、科学的精神は詩的精神を重んずる所に逆説的にも潜んでゐると云ふ事実だけを指摘したいのである。

（傍線引用者）

これは、「続文芸的な、余りに文芸的な」の「八　コクトオの言葉」の内容である。フランスの詩人で作家であるジャン・コクトー（一八八九～一九六三）は、鋭い近代的感覚と機智に溢れた詩精神の持ち主として知られており、その名は芥川の遺稿「或阿呆の一生」[1]にも言及されている。この箇所で芥川は、コクトオの言葉を援用しつつ、芸術と科学の繋がりや、芸術作品における科学的精神の重要性を論じる。

また、「科学的精神は詩的精神を重んずる所に逆説的にも潜んでゐる」という芥川の言葉は、作品の価値の高低を定める評価基準となる「詩的精神」が、いつまで経っても客観的で普遍妥当的な認識を保つ科学的精神に通じることを表す。科学的知見が必ずしも芸術創作の出発点であるとは限らないが、「詩的精神の浄化」を通ってきた文芸作品には、自ずと科学的思考が流れているということを、芥川は問うている。

〈詩的精神〉は、芥川の未定稿「滝井君の作品に就いて」（一九一六年）や、谷崎潤一郎との間で繰り広げられた「小説の筋」論争（一九二七年）に登場し、芥川自身が文芸の価値の高低を定める最も重要な指標となっている。〈詩的精神〉の定義をめぐって、芥川が「最も広い意味の抒情詩である」と捉えることから、〈詩的精神〉は作家の表現した感情や情緒に意義を見出すものであると考えられる。李彗珏氏[2]によると、芥川の求めた〈詩的精神〉は、〈純粋さ〉を追求し、小説の〈筋の面白さ〉を徹底的に排除しようとしたところにあるという。そこで、作者の主張した〈「話」らしい話のない小説〉と〈詩的精神〉の関係性が問われるが、芥川が〈詩的精神の浄化〉を通ってきた文芸作品の典型として、〈「話」らしい話のない小説〉を挙げることは、その両者がいわゆる包含関係にあることを窺わせる。

従来、〈詩的精神〉は、芥川による志賀の心境小説への憧れを示す用語として、芥川の「蜃気楼」はその実践であるとの見方が強かったのだが、実際にその内実は複雑で多義的であると、篠崎美生子氏[3]は指摘する。

〈詩的精神〉をめぐる「多義的な内実」に迫り、その一端を示す際、上記に述べた「芸術は科学の肉化したもので

ある」、「科学的精神は詩的精神を重んずる所に逆説的にも潜んでいる」といった芥川の文学理論は、示唆を与えてくれる。芥川が「続文芸的な、余りに文芸的な」において言及している、これらの言葉は、〈文学〉と〈科学〉両者の相関を示すものでもある。即ち、ありとあらゆる芸術作品の根底には、科学的思考が流れており、〈詩的精神〉を重んじる作者の文芸観も例外ではないことを表している。仮に〈詩的精神の浄化〉を余り意識せずに、創作された文学作品であっても、その底流には依然として科学的思考が存在するのだろう。「続文芸的な、余りに文芸的な」に描かれている、このような芸術論は、芥川の文学における科学の様相を分析する際の足がかりとなる。

〈文学〉と〈科学〉両者の相関を示す芥川の文学理論が実践的に示され、具現化されたものとして、作者の第八短篇集『湖南の扇』（文芸春秋社、一九二七年六月）の作品群を挙げることができよう。そこには、精神分析学の創始者であるジークムント・フロイト（一八五六～一九三九）の夢理論、無意識、抑圧等の精神科学的知見や、当時の夢学、心理学からの影響が窺える作品が多数収録される。「海のほとり」「蜃気楼」「年末の一日」「彼　第二」等の収録作品がそれに該当するものであると考える。芥川生前の最後の短篇集でもある『湖南の扇』は、作者が「行き詰まりを打開する為に在来の作風を離れて、全く歴史的題材をすて、自己身辺の現実世界に取材して」描いた「随筆的な、筋をもたない小説」[4]として特徴づけられる。いわば、〈詩的精神〉が流れるとされる〈「話」らしい話のない小説〉に対する、芥川の心酔ぶりが示されている作品群であると言えよう。

以上のようなことから、本稿では芥川が主張した〈文学〉と〈科学〉の相関関係を、同時代の精神科学の影響が窺える作者の晩年の作品、「海のほとり」の分析を通して示したい。芥川のフロイト受容をめぐって、既に実証的研究がなされていることから、本稿ではフロイトの提起した『快感原則』や『欲動論』の理論を、小説「海のほとり」を読み解く補助線にし、新しい解釈を提示する。芥川が精神分析のこれらの概念まで見識を深めたとは考えにくいが、「海のほとり」には、フロイトの精神分析を貫く、そうした理論で解説できるような事象が内包されている。

本稿での考察は、同時代の精神科学が芥川の晩年の作品の形成にどのように寄与したのかを調べる一環でもある。

このような研究は、先行論から「多義的な内実」を伴うとされている、芥川の〈詩的精神〉の解析に、〈精神科学〉という新しい視座を与えることにも繋がるだろうと考える。

一、「海のほとり」における〈僕〉の深層心理

芥川の小説「海のほとり」は、一九二五年九月『中央公論』に発表され、後に短篇集『湖南の扇』や全集に収められている。本作は、一九一六年夏、芥川が久米正雄と共に千葉・一宮海岸に避暑していた頃の体験をもとに描いたものである。作者が、執筆時点から九年前の記憶を辿り、それを作品化したとのことから、「海のほとり」は、「遠い青春の日々への哀惜の念」を「去りゆく夏の日の避暑地のひとこまに託して描いた」[5]作品として読まれてきた。そして本作は、芥川の書いた〈「話」らしい話のない小説〉の嚆矢[6]として位置付けられている。

「海のほとり」をめぐって、吉田精一氏[7]は「筋らしい筋のない、彼としては珍しい素直なスケッチであり、一種の心境小説でもある」としながら、「強いて批評すれば、よくまとまってはいるが、深い暗示にも、きびしい実感にもとぼしい」と論評している。三好行雄氏[8]は、「海のほとり」が〈「話」らしい話のない小説〉へ傾倒していた、晩年の芥川の実践的な試みの最初となると位置づけながら、本作には「小説的な事件はなにひとつ起らず、登場人物の織りなす心理模様としてさえ、ドラマの消えた心象風景である」と論じる。ただ、作者の狙いが「一篇の風物詩にあった」とは言え、「この小説には、情念の流露に身をゆだね切れない認識者の眼が消えのこっている」と、三好氏は「海のほとり」が含蓄のある作品であることを示唆する。

従来、「海のほとり」は、芥川が志賀直哉の「焚火」の方法を模倣して描いた作品であると見做され、「焚火」との比較検討が多くなされており、また「続　海のほとり」という副題を持つ、「蜃気楼」との関連からも盛んに論じられてきた。本作の創作方法をめぐって、志賀の「焚火」を模倣したことにいち早く着目した三嶋譲氏[9]は、「海のほと

り」を芥川の「志賀への実践的挑戦といった引き金」として捉える。大正後期、芥川が志賀文学へ接近したその背景には、志賀に対する芥川の文学的尊崇の念のほか、大正十二年以降、私小説的方法の模索と相俟って、芥川自身による「〈私〉の表出あるいは定着への希求」があったと、三嶋氏は分析している。さらに神田由美子氏[10]は、「海のほとり」が志賀の「焚火」を下敷きにして創案されたものの、「焚火」において〈自然と人間〉、〈夢と現実〉の渾然一体化を図った志賀と違い、芥川は「海のほとり」を〈自然〉や〈夢〉と対立する〈人生〉と〈現実〉の苦悩に汚染させてしまったと論じる。

近年になると、「海のほとり」における、フロイトの精神分析の受容が注目されるようになった。一柳廣孝氏[11]の「「無意識」という物語―「海のほとり」を中心に」をその代表的な論考として挙げられる。一柳氏によると、「海のほとり」には、夢を媒介した無意識の言説化という、小説の方法論の問題が色濃く投影されているという。

しかし「海のほとり」には、フロイトの無意識や、夢理論に限らず、精神分析理論の根源原理である『快感原則』（不快を避けて、快楽を求める無意識の傾向）の本質に迫るものもあるように考える。以下、精神分析の知識を参考にしながら、「海のほとり」の考察を深めたい。

（一）「識域下の我」に底流するもの

「海のほとり」は、芥川の主張する「詩的精神」に浄化した、〈筋のない小説〉又は〈「話」らしい話のない小説〉である。言い換えれば、本作は、作者の表現する主観的な感情や情緒など、内部世界に力点が置かれる小説でもある。

注目に値するのは、「海のほとり」の内面描写に、フロイトが一九二〇年の『快原理の彼岸』（『快感原則の彼岸の彼岸』とも）において持ち出した[12]〈二元論的な欲動論〉、即ち死の本能（欲動）と生の本能（欲動）が、協同、又は対抗しながら生命現象を担う、という精神分析理論の本質に迫るものが見受けられることである。具体的に言え

ば、三章構成になる「海のほとり」は、一見それぞれのブロックで語られている内容が密接な繋がりを持たないように見えるが、実際にそれらは、フロイトの提起した本能二元論、「生の継続を強いる」[13]生の欲動（性的本能とも）と「無生の状態を回復しようとする」[14]死の欲動（自我本能とも）の協同、葛藤から派生する心的現象として共通している。これについては、三節に分けてそれぞれ検討したい。

まず、「海のほとり」の（一）章から見ていく。この章には就職先が決まらないまま大学を卒業した〈僕〉と友人Mが、夏の終わりのひと時を海辺の避暑地で過ごしていることや、一匹の鮒が自分に声をかけてくるという〈僕〉の夢が描かれている。

「哀れっぽい声を出したつて駄目だよ。又君、金のことだらう？」

「いいえ、金のことぢやありません。唯わたしの友だちに会はせたい女があるんですが、……」（中略）

僕は暫く月の映つた池の上を眺めてゐた。池は海草の流れてゐるのを見ると、潮入りになつてゐるらしかつた。そのうちに僕はすぐ目の前にさざ波のきらきら立つているのを見つけた。さざ波は足もとへ寄つて来るにつれ、だんだん一匹の鮒になつた。鮒は水の澄んだ中に悠々と尾鰭を動かしてゐた。

「ああ、鮒が声をかけたんだ。」

僕はかう思つて安心した。―

僕の目を覚ました時にはもう軒先の葭簾の日除けは薄日の光を透かしてゐた。僕は洗面器を持つて庭へ下り、裏の井戸ばたへ顔を洗ひに行つた。しかし顔を洗つた後でも、今しがた見た夢の記憶は妙に僕にこびりついてゐた。「つまりあの夢の中の鮒は識域下の我と言ふやつなんだ。」―そんな気も多少はしたのだつた。

（傍線引用者、以下同様）

作中における「識域下の我」という言葉は、芥川が精神分析の創始者であるフロイトから影響を受けた証しになろう。というのも、意識されない領域のことを意味する「識域下」は、精神分析で言う無意識を指すからである。

夢と無意識の関わりについて、フロイトは『夢判断』（一九〇〇年）において、夢が無意識への通路であり、夢分析は無意識の働きを意識的に把握するための技法であるとする。また、夢の形成には日中残滓や過去の諸体験がきっかけになる[15]とも言われる。

作中の〈僕〉が、里見八犬伝の家臣である蜑崎照文が砂金を捧げる場面を読んだり、自分の原稿料のことを思い出したりしたことと相俟って、〈僕〉の夢にもお金にまつわる場面が現れる。また、「夢の中の鮒は識域下の我と言ふやつなんだ」という一文は、〈僕〉が夢認識を通じて、改めて自分のことを客観視するように受け取られる。これらは、夢に無意識の願望が表れる、というフロイトの夢分析に符合するものであり、芥川がフロイトの夢知識を摂取し、それを自らの創作に取り入れたことを窺わせる。

なお、夢の中の〈僕〉は「唯わたしの友だちに会はせたい女があるんですが、……」という話を聞くと、「急にわくわく」心を躍らせる。戸松泉氏[16]によると、この場面は、芥川が久米正雄と共に千葉県長生郡一宮町の一宮官に滞在した当時、後の妻・塚本文に求婚の長い手紙を書いていたとのことが想起されるという。つまり、「海のほとり」において、鮒の現れる夢は、異性関係をめぐる〈僕〉の潜在的思考であり、芥川が自分自身を髣髴とさせる作中の〈僕〉に殊更このような夢を見させたのは、夢が抑圧される願望の無意識的な発露であるという精神分析の知見に基づいた手法であろう。

「海のほとり」において、夢中の〈僕〉は、自分に声をかけてくる人影が見えず困惑したが、鮒を発見するとすぐに安心感を取り戻す。〈僕〉にとって、鮒はどのような存在なのだろうか。鮒の表す意味や、その象徴をめぐって、従来十分に検討されていない。

鮒の表象は、「海のほとり」の読解において、看過できない問題である。その象徴については、作中における「夢の中の鮒は識域下の我」という〈僕〉の言葉を手掛かりに、フロイトの無意識理論に鑑みることができる。フロイトは、『無意識について』[17]（一九一五）の中で、意識と無意識の相関を、「生命ある有機体に内属する衝迫」である

〈欲動〉[18]という概念を介在させながら、以下のように述べる。

私はじっさい、意識と無意識の対立は、欲動には適用されないと考える。欲動は、意識の対象とはなりえない。ただ欲動をあらわしているところの表象だけが、意識の対象となりうるのである。けれども欲動は、無意識のうちにあっても、表象によってあらわされるしかない。欲動が表象に付着するか、あるいは一つの感情状態としてあらわれるかしなければ、欲動についてはなにも知ることができないであろう。

「無意識」、或いは「意識下」に閉じ込められていた感情の発露には、人間の本能とも言えるべき〈欲動〉の働きがある。しかし、〈欲動〉は直接意識にのぼることなく、その動きを示す〈表象〉を通してしか、人に認知され得ないのである。或いは、無意識下の情動が、一つの感情状態として表れる時こそ、その欲動について理解することができる。

以上のような精神分析の知識を視野に入れると、「海のほとり」において、〈鮒〉を〈識域下の我〉に擬えたという設定は、芥川がフロイトの無意識に対する理解が深かったことを示唆する。換言すれば、芥川は、無意識の領域に閉じ込められていることが、「欲動をあらわしている」表象を通じてしか認識されない、という精神分析の知見を持ちながら、〈夢の中の鮒〉は〈識域下の我〉とのことを前面に押し出したとも理解できよう。

ここで注目すべきなのは、無意識の奥底に抑圧されている感情が、意識に上らせるために、〈表象〉が作り出されること、しかもその〈表象〉は〈欲動〉に繋がっているということである。有機的生命における慣性の表れである〈欲動〉は、フロイト思想の根幹に据えられる概念であり、フロイト自身は、それを「精神的なものと身体的なものとのあいだの境界概念」[19]であるとしている。

フロイトのこの理論に鑑みると、鮒の現れる夢は、「海のほとり」における〈僕〉の「生の欲動」を表す心的表象として受け止められる。夢中の〈僕〉が、「会はせたい女があるんですが」と声を発した鮒に気づいて安堵感を覚え

たのも、目覚めた後、夢の記憶が「妙に僕にこびりついてゐた」のも、〈僕〉が「水の澄んだ中に悠々と尾鰭を動かしてゐた」鮒に、〈生〉を見出したからではないだろうか。ただ、〈僕〉の気分は爽快にならなかった。その理由に関しては、次章で具体的に考察してみよう。

（二）〈僕〉の奥底に眠っている感情をめぐって

「海のほとり」の（二）章には、雨がやみ、海水浴へ出かけた〈僕等〉が、海辺で見かけた少年や二人の少女の姿、及び自然の風景などが写実的に描き出される。

暮れかかった夏に未練を持って、友人Mと一緒に海へ泳ぎに行ったものの、〈僕〉は「到底泳ぐ気にはなれなかつた」。Mは、誘いに応じなかった〈僕〉を後にし、一人でずんずん海の中へ入っていたが、水母に首の周りを刺され、すぐに海から上がってきた。しかし、「僕等」とは対照的に、再び海水浴に現れた同年輩の二人の少女は、楽しそうに海で戯れる。彼女たちの姿は、「この寂しい残暑の渚と不調和に感ずるほど花やかに見えた」だけでなく、〈僕〉には「実際人間よりも蝶の美しさに近いもの」のように感じられる。特に、真紅の海水着を着た少女は、水中を浮遊する水母を発見すると、甲高い声をあげ、もう一人の少女を招こうとしたが、その時「遠目にも活き活きと笑つてゐた」という。水母に好奇心を掻き立てられたように見える少女の姿は、水母に命の危険を感じ、すぐさま退く友人Mのそれとは対比をなしている。

そして〈僕〉は、沖へ出ていく二人の少女の姿を「海水帽ばかりに」見えるまで見届け、「それから余り話もせず」宿へ帰っていくが、この時の〈僕〉の心境には何か変化が起きたかのようにも見受けられる。

〈僕〉の心底に潜む意識を炙り出すに当たって、精神分析的視点を導入することは、有効的であろう。芥川がフロイトの無意識理論や夢分析など、精神分析の影響を受けたことは、一柳廣孝氏[20]、篠崎美生子氏[21]、田口律男氏[22]等によって指摘されている。ただ、芥川がフロイトの『欲動論』や『快感原則』の理論まで理解を深めたとは思えな

い。それにしても作者が、「海のほとり」の〈僕〉の心理の有様や推移を描写する際、〈生の欲動〉や〈死の欲動〉といった精神分析の概念で解釈できるような事柄を、無意識的に作中に取り込んだという可能性は十分あるものと考えられる。何故なら、フロイトの精神分析は、精神科学や精神医学の範疇に収まり、学問的な普遍性を持つからである。

心理分析を通じて、精神疾患の治療を目指した精神科医・フロイトは、早くから無意識を含む人間の精神内部に、深い葛藤が存在することを認識した。その葛藤ついて、彼は『心因性視覚障害の精神分析的理解』（一九一〇）の中で「性的満足を求める欲動と、個人の自己保存を目標とするいま一つ別の欲動、すなわち自我欲動との間の否定しがたい対立」[23]が存在すると述べる。ここに言及されている、対立関係にある二つの欲動は、その十年後に発表される『快原理の彼岸』（一九二〇）の中で、それぞれ「生の欲動」、「死の欲動」として正式に命名されるようになる。[24]「自我欲動＝死の欲動」、「性欲動＝生の欲動」という欲動二元論は、精神分析の根本的理論であり、人間の心の葛藤の起源を追求した、フロイトが晩年に至るまで保持し続けた主張でもある。

・個々の存在を超えて生き延びるこれらの基礎的有機体の運命に留意し、外界の刺激に対し無防備なこれら有機体を安全にかくまうよう配慮し、また他の胚細胞と一緒になれるように取り計らう、等々のことをする欲動が、一群の性欲動を形成する。（中略）それらが本来の生の欲動である。

（『快原理の彼岸』[25]、傍点引用者）

・生命あるものはすべて内的根拠に従って死に、無機的なものへと帰ってゆくということを、例外なき経験として仮定することが許されるなら、われわれは次のようにしか言いようがない。すなわち、あらゆる生命の目標は死であり、翻って言うなら、無生命が生命あるものより先に存在していたのだ、と。

（『快原理の彼岸』[26]）

フロイトによると、「生命の更新を求め、かつそれを実現する」[27]〈生の欲動〉とは逆に、〈死の欲動〉は生命ある

ものを「無機的なもの」へ回帰させるという。彼は、〈死の欲動〉（自我欲動）が、「生命のない物質に生命が与えられたことに由来し」[28]たため、欲動の守旧的性格から「生命なき状態を再興しようと欲する」[29]と想定したのである。

要するに、フロイトは欲動論を通じて、生命の全体現象を「生の欲動」（性欲動）と「死の欲動」（自我欲動）の協同、対立、抗争の現れとして捉える。

人間の欲動に関する、フロイトの理論は、「海のほとり」の〈僕〉の深層心理をあぶり出す、足がかりとなり得る。従来、「海のほとり」は〈筋らしい筋のない〉小説として読まれてきたが、上記に示された精神分析理論を顧慮すると、その物語世界には、〈僕〉の生と死について思索を巡らした軌跡が投影されていることがわかる。つまり、作中において、〈僕〉が水母を発見して沖へ出ていく二人の少女を最後まで見届け、「それから余り話もせず」宿へ帰って行ったのも、また水母に遭遇した時、Mとは対照的な態度を見せる少女をずっと注視していたのも、彼女たちの姿に〈生〉を見出したからである。換言すると、無邪気に海を楽しむ少女たちの姿は、生命現象の背後に存在し、絶えず抗争・拮抗する〈生の欲動〉と〈死の欲動〉の中で、欲動の重心が〈生〉の方に傾斜しているように〈僕〉には受け取られたのだろう。更に、当初「とうてい泳ぐ気にはなれなかった」といった〈僕〉の様子は、「殆ど傍若無人に僕等の側を通り抜けながら」、「まつすぐに渚へ走つて行つた」彼女たちのそれと丁度対比的であり、〈僕〉が少女たちと対極にあることを仄めかす。正に、「それから余り話もせず」宿の方へ「ぶらぶら帰って行った」とあるように、〈僕〉は自分の心の奥底に潜んでいる暗い感傷に気づきながら、歩いていったのだ。

（三）幽霊騒動が示すもの

「海のほとり」の（三）章には、〈僕等〉が帰省中の友人H、宿の若主人Nさんと一緒にもう一度海へ行った時、話題にのぼった幽霊騒動が描かれている。Nさんによると、澪に流され命を落とした、ながらみ取りの幽霊が卵塔場に

現れるという話は、ただの噂に過ぎなかったという。実際、海軍の兵曹上がりの男が、「宵のうちから卵塔場に張りこんでゐて」幽霊を見届けると、そこには、水死したながらみ取りと夫婦約束をしていた達磨茶屋の女が現れる。

「ぢや別段その女は人を嚇かす気で来てゐたんぢやないの？」

「ええ、唯毎晩十二時前後にながらみ取りの墓の前へ来ちや、ぼんやり立つてゐただけなんです。」

Nさんの話はかう言う海辺に如何にもふさはしい喜劇だつた。が、誰も笑ふものはなかつた。のみならず皆なぜともなしに黙つて足ばかり運んでゐた。

「さあこの辺から引つ返すかな。」

僕等はMのかう言つた時、いつの間にかもう風の落ちた、人気のない渚を歩いてゐた。あたりは広い砂の上にまだ千鳥の足跡さへかすかに見えるほど明るかつた。しかし海だけは見渡す限り、はるかに弧を描いた浪打ち際に一すぢの水沫を残したまま、一面に黒ぐろと暮れかかつてゐた。

Nさんから幽霊に纏わる話を聞いた後、「皆なぜともなしに黙つて足ばかり運んでゐた」のは、「幽霊」の実体が達磨茶屋の女だったという決着に収れんしきれない側面を持つことを仄めかす。つまり、海軍の兵曹上がりの男が捕まえたのが折よく達磨茶屋の女だった可能性も否定できないからだ。また、「ながらみ取りの死骸」が「蝦だらけになつて上がつた」という話が事実であるなら、ながらみ取りの幽霊が実際に現れたということも考えられるのではないだろうか。

亡霊の中でも、特に「不自然死を遂げし者」の幽霊が現れることが多く、「近親者乃至怨敵にして、其の目的は自己の残念とする所を示し、又は以て祟らんとする」[30]とするということは古くから伝えられてきた。「海のほとり」の場合、「磯つ臭い山のかげの卵塔場」に実際に幽霊が出現したかどうかはともかく、死者の回帰を匂わす幽霊騒動は、不気味に思われる事象であったことは間違いない。もしかすると、Nさん以外の〈僕等〉の中には、幽霊騒動を単なるハプニングとしてではなく、重く受け止める人もいたのかもしれない。〈僕〉がそのように思う一人ではな

かっただろうか。「弧を描いた浪打ち際」の海の荒れ狂う様子や、「広い砂の上にまだ千鳥の足跡さへかすかに見えるほど明るかつた」のに、海際だけ「一面に黒ぐろと暮れかかつてゐた」という風物描写は、〈僕〉の沈んだ気分を象徴的に表すものである。

さて、「海のほとり」の〈僕〉が、暗い気持ちに苛まれる理由とは何だろうか。幽霊の話は、〈僕〉が憂鬱を感じる本当の理由とは思えない。

フロイトによると「驚愕させるもの、不安や恐怖を引き起こすものの一つ」[31]が「不気味なもの」(『不気味なもの』一九一九)で、「不気味に思われるもの」には「多くの人々にとって、死と、死体、死者の回帰、霊魂や幽霊と関わりのあるものである」[32]と解釈する。これを参考にすると、「海のほとり」の〈僕〉が幽霊の話を聞いて気分が沈んだのも、詰まる所、〈僕〉自身の抱える死への不安や恐怖心からであり、幽霊の話は〈僕〉の不安感情を助長させたことがわかる。そして、〈僕〉のそのような内的感覚は、〈僕〉の中に渦巻く生と死の欲動の対立、抗争の現れとして理解することができよう。

精神分析で言う〈死の欲動〉が、はじめて登場したのは、フロイトの『快原理の彼岸』(一九二〇)においてである。フロイトは、戦争のトラウマを抱える患者の診療に〈死の欲動〉の着想を得たと知られる。第一次世界大戦帰還兵だったその患者が、災害の場面が強迫的に反復されるのに苦しんでいたことから、フロイトは「心の無意識の中には、欲動の蠢きから発生する反復強迫の支配を認めることができる」[33](『不気味なもの』一九一九)と主張する。「欲動の最も内的な本性そのものに依存しており、快原理[34]を超え出るほどにも強く、心の生活の特定の側面に魔的な性格を帯びさせるもの」[35]と特徴づけられる〈反復強迫〉は、フロイトの精神分析で〈死の欲動〉の顕現形態として見做される。

話を「海のほとり」に戻すと、作品の結末において、〈僕〉は友人Mに「僕等ももう東京へ引き上げようか?」と提案する。〈僕〉が海辺を離れようとしたのも、幽霊の話によって増幅された不安の感覚が解消できず、繰り返し

〈僕〉の意識に浮上したからであろう。いわば、精神分析で言う〈反復強迫〉という〈死の欲動〉側にある衝動現象が、その時の〈僕〉の中で起きたと察せられる。

しかし、友人Mの場合は、〈僕〉と全然違っていた。彼は、むしろ「気軽さうにティッペラリイの口笛を吹きはじめた」のだ。第一次世界大戦中、イギリス兵士が行軍歌として愛唱した歌[36]であるティペラリーは、これから新しい生活をスタートしようとする、Mの意気込みや情熱を仄めかすもののように考える。

このように、「海のほとり」の読解に精神分析の知見を導入することで、芥川の「素直なスケッチ」に隠されている、心理学的な法則性を見つけることができる。精神分析的な観点から言うと、「海のほとり」の第一章において、〈僕〉の欲動の重心は〈生〉の方に傾いたのだが、第二章では〈生〉と〈死〉の欲動が拮抗し合うようになる。そして第三章になると、〈僕〉の欲動の重心は次第に〈死〉の方に傾斜しつつあることが見受けられる。第三章に描かれている幽霊騒動は〈死の欲動〉或いは死をイメージする事案であると言える。このような捉え方は、生命の全体現象を「生の欲動」（性欲動）と「死の欲動」（自我欲動）の協同、対立、抗争の現れとする、フロイトの欲動論を踏まえたものであり、〈筋らしい筋のない〉小説と評されてきた「海のほとり」の魅力の再発見に繋がるだろう。

二、芥川の短篇集『湖南の扇』と精神科学

本稿で中心的に取り扱う「海のほとり」は、作者が生前出した最後の短篇集『湖南の扇』の収録作品である。『湖南の扇』をめぐって、渡部芳紀氏[37]は「死の影をややとどめてはいるものの、すっきりした。一つの澄明な世界を生み出し」たと述べるのに対し、清水康次氏[38]は「作品選択のせいであって」、「同一の時期の重要な作品がこれほど省かれている例は、他の短篇集には見られず」と論じる。従来、作品集『湖南の扇』には力作が少ないとの理由から、余り注目されていなかった。

しかし、短篇集『湖南の扇』は、芥川における同時代の精神科学の受容や影響が垣間見られる、集成であるように考える。そこには、「海のほとり」のほか、「蜃気楼」や「年末の一日」、「彼　第二」等、精神分析の無意識を指す言葉や、大正期の夢学や心理学で不健全な精神の傾きを表す色彩夢を盛り込む作品が、多数収録されている。これらの作品には、作者の他の短篇集の収録作品からは余り見出せない、同時代の精神科学知見の受容が見られる。ただ『湖南の扇』のこのような特徴が、論じられるようになったのは、近年になってからである。一柳廣孝氏は、著書『無意識という物語』（名古屋大学出版会、二〇一四）の中で、『湖南の扇』の収録作品である「年末の一日」、「海のほとり」、「蜃気楼」における夢に着目しつつ、「そこには「無意識」に対する独自の視点が仮託されている」と論じる。

なお、〈文学〉における〈精神科学〉の影響に関しては、芥川自身の言説も少なからずある。

・芸術家はいつも意識的に彼の作品を作るのかも知れない。しかし作品そのものを見れば、作品の美醜の一半は芸術家の意識を超越した神秘の世界に存してゐる。一半？或は大半と云つても好い。

我我は妙に問ふに落ちず、語るに落ちるものである。我我の魂はおのづから作品に露るることを免れない。一刀一拝した古人の用意はこの無意識の境に対する畏怖を語ってはゐないであらうか？

（『侏儒の言葉』「創作」）

・我々の性格上の特色は、―少なくとも最も著しい特色は我々の意識を超越してゐる。

（『侏儒の言葉』「無意識」）

・僕はヒステリイの療法にその患者の思つてゐることを何でも彼でも書かせる―或は言はせると云ふことを聞き、少しも常談を交へずに文芸の誕生はヒステリイにも負つてゐるかも知れないと思ひ出した。虎頭燕頷の羅漢は暫く問はず、何びとも多少はヒステリツクである。殊に詩人たちは余人よりもはるかにヒステリツクな傾向を持つてゐるであらう。

（『文芸的な、余りに文芸的な』「三十五　ヒステリイ」）

上記の引用からわかるように、『侏儒の言葉』において芥川の語る「意識を超越した神秘の世界」や、「我々の意識を超越している」性格上の特色は、精神分析理論の無意識を指すことが窺える。また、『文芸的な、余りに文芸的な』における「ヒステリイの療法」というのも、精神分析の療法をさし示す。というのも、芥川の論及するヒステリー症患者の治療方法が、フロイトの提示した療法[39]と共通するからである。これらは、芥川が領域横断的に精神科学の知識を得たことを表すと共に、その文学にも少なからず影響を与えたことを暗示する。

作者の最晩年の傑作[40]の一つに数えられる「蜃気楼」も、芥川の精神分析受容が見受けられる作品である。そこに用いられている「意識の閾の外」という言葉は、精神分析の無意識に通じるもので、意識されない領域のことを意味する。「或は「続海のほとり」」という副題を持つ「蜃気楼」の場合、作中の〈僕〉は常に不安や恐怖心に駆られてしまう。何ものかに〈無気味さ〉を感じるその頻度は、「海のほとり」の〈僕〉を遥かに上回る。フロイトの『不気味なもの』（一九一九年）によると、〈不気味なもの〉を想起させる主な要因は〈反復強迫〉であり、〈不気味なもの〉というのも、慣れ親しんだものが抑圧された後、再び回帰してきた時に感じる不気味さであるという[41]。このような精神分析の知見に鑑みると、「蜃気楼」の〈僕〉が感じる無気味さというのも、一時的な感覚であるより、むしろ無意識のうちに抑圧されていた感情の発露であることがわかる。

芥川の精神科学受容は、作者の晩年の夢小説にも表れている。芥川は、随筆「夢」（一九二六年）と未定稿「夢」（一九二七年）の中で、「夢の中に色彩を見るのは神経の疲れてゐる証拠である」、「色彩のある夢は不健全な証拠だ」とそれぞれ描いている。これは、大正期の夢研究書である『夢学』[42]に記載されている、「病的状態と色彩夢とは関係を有することあり」という内容と共通するのであり、芥川が同時代の夢研究から影響を受けたことを窺わせる。

繰り返すが、色彩夢は作者の「彼　第二」、「年末の一日」にも描かれている。ただ「彼　第二」の場合、色彩夢のほかに、現実感の強い夢や重複夢など、〈僕〉の多様な夢が描かれている。「年末の一日」の〈僕〉は、水鳥が二羽泳いでいる夢を見て「余り翼などの鮮かに見えるのは無気味だつた」と語る。この一文も、作中の〈僕〉が、色彩夢が

心身の不調を表す指標になるのを疾うに知っていたことを仄めかす。

おわりに

芥川は最晩年に書いた評論『文芸的な、余りに文芸的な』を通じて、「どう云ふ思想も文芸上の作品の中に盛られる以上、必ずこの詩的精神の浄化を通つて来なければならぬ」と、自らの文芸観を露わにする。いわば、〈詩的精神〉の浄化の熱の高低が、その作品の価値の評価基準となっているのだ。〈詩的精神の浄化〉を通ってきた文芸作品の好例として、作者は〈「話」らしい話のない小説〉を取り上げる。

本稿では芥川の「話らしい話のない」小説の嚆矢として見做される「海のほとり」の細部にもう一度光を当てた。特に、作中の〈僕〉の潜在意識や感情の機微を、精神分析の知識を参考にしながら読み取る。精神科学的視点を導入したのも、「芸術は科学の肉化したものである」、「科学的精神は詩的精神を重んずる所に逆説的にも潜んでいる」(『続文芸的な、余りに文芸的な』)という芥川の文学理論から示唆を得たからであり、また「海のほとり」に精神分析の影響が見受けられるからでもある。

「海のほとり」における〈僕〉の夢を、フロイトの精神分析に照らし合わせて考えると、鮒の現れる夢は「生の欲動」を表す心的表象として理解できる。また、生命の全体現象を「生の欲動」(性欲動)と「死の欲動」(自我欲動)の協同、対立、抗争の現れとして捉える、フロイトの欲動論は、「海のほとり」の〈僕〉の深層心理をあぶり出すための足がかりとなる。

従来、「海のほとり」は〈筋らしい筋のない〉小説として読まれてきたが、精神分析理論に鑑みると、そこには、物語世界を構築していく〈僕〉の、生と死について思索を巡らした軌跡が残されていることがわかる。いわば、「海のほとり」の場合、精神分析で言う本能二元論、即ち「生の継続を強いる」〈生の欲動〉と「無機的なものへと帰っ

てゆく」〈死の欲動〉を基調とし、物語世界の構築を支えていると言えよう。三好行雄論の「ドラマの消えた心象風景」と裏腹な「情念の流露に身をゆだね切れない認識者の眼」というのも、絶えず〈生の欲動〉と〈死の欲動〉とを綯交ぜる「海のほとり」〈僕〉の心的活動を暗示するのではないだろうか。

科学的精神を重要視する芥川の文学観は、作者の第八短篇集『湖南の扇』の作品群に顕著に現れる。本稿の第二章では『湖南の扇』の収録作品である「彼　第二」や、「年末の一日」、「蜃気楼」を取り上げ、それぞれの作中から見られる精神分析の影響を簡潔にまとめた。

要するに、芥川の「話らしい話のない小説」の典型となる、「海のほとり」には、〈無意識〉や〈夢解釈〉等フロイトの精神分析の知識が取り入れられ、「筋らしい筋のない」物語の構築を支えていると捉えられる。いわば、芥川における同時代の精神科学受容は、作者の提起した〈詩的精神〉の「多義的な内実」の一端を担うものでもあったと言えよう。

注

1　芥川龍之介「或阿呆の一生」の〈五十　俘〉には、「彼は神を力にした中世紀の人々に羨ましさを感じた。しかし神を信ずることは―神の愛を信ずることはとうてい彼には出来なかった。あのコクトオさえ信じた神を！」とある。

2　李彗珏「芥川龍之介の晩年の文学観」『待兼山論叢（48）』（二〇一四年）九五―一一〇頁

3　篠崎美生子「詩的精神」（関口安義編『芥川龍之介新辞典』翰林書房、二〇〇三年）二六一頁

4　吉田精一『芥川龍之介』（新潮文庫、一九五八年）二一一頁

5　三嶋譲「芥川龍之介「蜃気楼」試論―「海のほとり」から「続　海のほとり」へ」『佐世保工業高等専門学校研究報告』第一四

号（一九七七年一一月）一―一三頁
6　岩崎文人「海のほとり」（志村有弘編『芥川龍之介大事典』（勉誠出版、二〇〇二年）三八二―三八三頁
7　吉田精一『芥川龍之介』（新潮社、一九五八年）二一五頁
8　三好行雄『芥川龍之介論』（筑摩書房、一九七六年）三二一頁
9　前掲三嶋譲「芥川龍之介「蜃気楼」試論―「海のほとり」から「続　海のほとり」へ」『佐世保工業高等専門学校研究報告』第14号（一九七七年一一月）一―一三頁
10　神田由美子「芥川龍之介における〈私小説〉―「海のほとり」について」『東洋女子短期大学紀要』第二九号（一九八八年三月）一―一五頁
11　一柳廣孝『無意識という物語』（名古屋大学出版会、二〇一四年）一五四―一六八頁
12　片山文保「自我と欲動」『明星大学研究紀要．人文学部』第五一号（二〇一五年三月）一―一七頁
13　井村恒郎他訳『フロイト著作集　第六巻』（人文書院、一九七二年）一七七頁
14　井村恒郎他訳『フロイト著作集　第六巻』（人文書院、一九七二年）一七八頁
15　高橋義孝訳『フロイト著作集　第二巻　夢判断』（人文書院、一九七八年）一四三頁
16　戸松泉「識域下の我」（関口安義編『芥川龍之介新辞典』翰林書房、二〇〇三年）五六頁
17　井村恒郎他訳『フロイト著作集　第六巻』（人文書院、一九七二年）九五頁
18　須藤訓任他訳『フロイト全集17』（岩波書店、二〇〇六年）九〇頁
19　井村恒郎他訳『フロイト著作集　第六巻』（人文書院、一九七二年）六三頁
20　一柳廣孝『無意識という物語』（名古屋大学出版会、二〇一四年）五頁
21　篠崎美生子「「芥川研究」の文法」『日本文学49(11)』（日本文学協会、二〇〇〇年）四三―五二頁
22　田口律男「芥川文学に於ける狂気とモダニズム―ストラテジーとしての〈病〉」『日本近代文学（57）』（日本近代文学会、

一九九七年一〇月）五〇―六四頁

23 高橋義孝他訳『フロイト著作集　第一〇巻』（人文書院、一九八三年）一九七頁

24 須藤訓任他訳『フロイト全集１７』（岩波書店、二〇〇六年）一一〇頁

「われわれの見解ははじめから二元論的であり、しかもいまでは、対立する二者をもはや自我欲動と性欲動ではなく、生の欲動と死の欲動として命名するようになっており、それ以来、かつて以上に鋭く二元論的になっている。」とある。

25 須藤訓任他訳『フロイト全集１７』（岩波書店、二〇〇六年）、九四頁

26 須藤訓任他訳『フロイト全集１７』（岩波書店、二〇〇六年）、九二頁

27 井村恒郎他訳『フロイト著作集　第六巻』（人文書院、一九七二年）一七九頁

28 須藤訓任他訳『フロイト全集１７』（岩波書店、二〇〇六年）九八頁

29 須藤訓任他訳『フロイト全集１７』（岩波書店、二〇〇六年）九八頁

30 高峰博『幽霊とおばけ』（洛陽堂、一九一九年）四―五頁

31 須藤訓任他訳『フロイト全集１７』（岩波書店、二〇〇六年）三頁

32 須藤訓任他訳『フロイト全集１７』（岩波書店、二〇〇六年）三六頁

33 須藤訓任他訳『フロイト全集１７』（岩波書店、二〇〇六年）三二頁

34 須藤訓任他訳『フロイト全集１７』（岩波書店、二〇〇六年）五五頁

35 須藤訓任他訳『フロイト全集１７』（岩波書店、二〇〇六年）三二頁

36 細川正義「海のほとり」の〈注釈〉『芥川龍之介会全集　第十二巻』（岩波書店、一九九六年）三七五頁

37 渡部芳紀「第八短篇集『湖南の扇』『国文学　解釈と教材の研究』（一九七七年五月）一四四―一五〇頁

38 清水康次「『湖南の扇』」（関口安義編『芥川龍之介新辞典』翰林書房、二〇〇三年）二一四頁

39 懸田克躬他訳『フロイト著者集　第七巻』（人文書院、一九七四年）一二頁

40　菅聡子「蜃気楼」（関口安義他編『芥川龍之介全作品事典』（勉誠出版、二〇〇〇年）二七三頁
41　須藤訓任他訳『フロイト全集17』（岩波書店、二〇〇六年）三二―三八頁
42　高峰博『夢学』（有文堂書店、一九一七年）二一一頁

謝辞・付記

本論文の作成に当たり、ご指導いただきました鈴木暁世先生と、投稿した際、貴重なご助言をいただきました2名の査読者に心より感謝申し上げます。

「海のほとり」の引用は、『芥川龍之介全集 第十二巻』岩波書店（一九九六年十〇月）に拠り、傍線、傍点は全て筆者の付したもので、ルビは省略しました。

キン　コウカ（大阪大学大学院文学研究科日本文学専攻博士後期課程）

The influence of psychiatry in the short story collection "Konan no Ougi" by Akutagawa Ryunosuke

Focusing on "Umi no Hotori"

JIN Xianghua

Akutagawa Ryunosuke's literary theory that "art is the flesh of science" is practically shown in the author's final collection of short stories, "Konan no Ougi." Especially, knowledge of contemporary psychiatry or dream psychology is applied to the recorded works such as "Umi no Hotori", "Sinkiro", and "Nenmatsu no Itsinitsi ". In this paper, I would like to show a part of how Freud's psychoanalysis and contemporary psychological knowledge contributed to the formation of Akutagawa's later works, focusing on the "Umi no Hotori." This research may also lead to giving a new perspective of psychiatry to the analysis of Akutagawa's "poetic spirit", which is said to be accompanied by "ambiguous content" from the previous theory.